縄文人の心と文化

平成16年2月24日(火) から 4月25日(日)

入館無料／月曜休館

午前10時開館　午後4時30分閉館

取手市埋蔵文化財センター　〒302-0007　取手市吉田383　TEL 0297（73）2010　FAX 0297（73）5003

森の祈り　縄文人の心と文化

日本列島に人類が足跡を残してから日本の国ができるまでの長い年月の研究が始まったのは明治時代でした。E.S.モースが東京大森貝塚を発掘してそこから出土した土器を「Cord marked pottery（縄文土器）」といったことから、この土器を作って使った時代を「縄文時代」とよぶようになりました。

こうして「縄文時代」という呼び方は日本の先史時代の「一時期」を示す固有の呼称として定着しました。いっぽう西欧の考古学では「石器時代」や「青銅器時代」など道具の材料の変化を人間の進化そのものと考えたために「時代」と「文化」を混同してしまいました。「石器文化」や「青銅器文化」は一般的な人間の文化のひとつを表現していますが、世界の人類が共有する時間として「石器時代」は存在しなかったのです。もしあるとすれば「フランスの石器時代」というように地域を限定した固有名詞として呼ぶことでしょう。しかしまったく西欧の考古学が役に立たなかったわけではなく、縄文時代の文化を西欧の石器時代の文化と比較することができました。そこで日本の縄文文化が西欧の新石器文化と共通するものであることが徐々にわかってきたのでした。

新石器文化の特徴は打製石器から磨製石器に変化すること、土器が作られたこと、農耕や動物の飼育がおこなわれたことでした。打製石器から磨製石器への変化は石皿や磨り石など植物の堅い木の実や根を消化しやすい粉にして食物としたことを示しています。狩猟の道具も以前は槍先型石器でしたが縄文時代には弓矢による狩猟形態に変化したことが多量に出土する石鏃からわかります。壊れやすく持ち運びに不向きな土器を、日常的に制作して使用するという生活から、縄文時代に「定住生活」が始まったことがわかります。「定住生活」では一定の土地に住居をつくり長期間の生活をします。それは限られた範囲の地域から得られる資源で生活してゆくことを意味します。その基盤となったのが、自然を積極的に利用し環境をコントロールすることでした。ここから縄文時代に農耕や動物飼育をおこなったと考えることができます。

縄文時代遺跡を発掘すると木を伐採するための磨製石斧や土を掘るための打製石斧が出土します。これらの道具から森を切り開き住まいを建てて村を作る開拓者であった縄文人の姿を眼に浮かべることができます。
発掘調査の出土品は「物的資料」にすぎません。調査の現場では「物的資料」に加えて手がかりとなる調査中の出土状態を写真撮影し記録します。それらを埋蔵文化財センターに持ち帰り「誰が、なにを、いつ、どこで、なぜ、どうやって（5W1H）」という研究から当時の文化や心の動きを復元します。そこから本来「もの」として残らなかった「縄文人の心」が浮かび上がってきます。今回の展示は「開拓者としての縄文人の心の動き」に視点をおいて発掘調査とその出土品をみてゆきます。

平成16年2月　　取手市埋蔵文化財センター

講演会のご案内　以下の日程で講演会・調査報告会を開催しますので是非ご参加ください。
各定員40名（当日受付順）　午後1時30分より　場所　取手市埋蔵文化財センター2階講座室

期日　3月27日（土）
講演会　「縄文時代の祈祷師」
講師　川崎純徳　氏（茨城県考古学協会副会長）

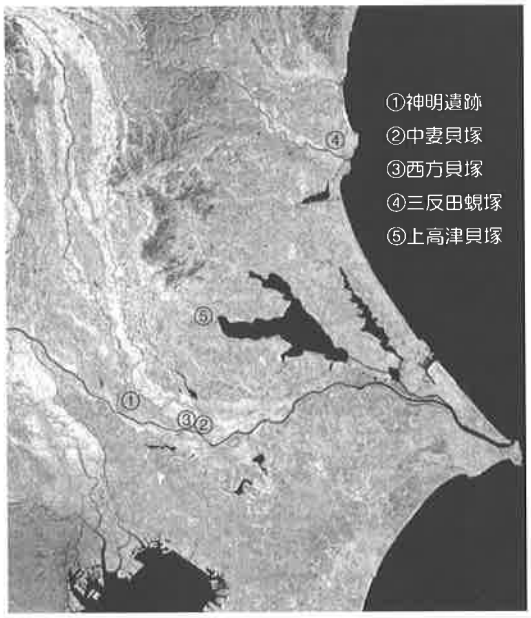
スライドでみる縄文遺跡の発掘
2月28日（土）　「西方貝塚の発掘」
3月13日（土）　「中妻貝塚の発掘」
4月10日（土）　「神明遺跡の発掘」

例　言

1. このパンフレットは平成16年2月24日から4月25日まで開催される取手市埋蔵文化財センター第12回企画展「森の祈り　縄文人の心と文化」にともない発行されたものです。
2. 展示の企画とパンフレットの執筆・編集は埋蔵文化財センター考古担当の宮内良隆が担当し、その他職員の協力を得ました。
3. 開催にあたり、ひたちなか市教育委員会、土浦市教育委員会から貴重な資料をお借りしました。
金子浩昌先生から西方貝塚出土埋葬縄文犬について貴重な鑑定をいただきました。国立歴史民俗博物館教授西本豊弘先生、小林園子氏に動物遺存体についてご教示いただきました。ひたちなか市埋蔵文化財調査センター所長鴨志田篤二氏、土浦市考古資料館関口満氏に発掘資料についてご教示いただきました。ひたちなか市文化スポーツ振興公社鈴木素行氏に玉稿をいただきました。
取手市文化財保護審議会委員諸星政得先生には展示全般をご指導いただきました。
記して深謝いたします。

貝塚ということ

縄文時代の遺跡といえばまっさきに思い浮かべるのは貝塚だろう。関東地方海岸沿岸部には縄文時代の貝塚が多い。茨城県では霞ヶ浦周辺に大きな貝塚が集中している。外洋に面した大きな貝塚は意外に少ない。縄文時代に内湾であった霞ヶ浦や河川流域で河口からやや陸地にはいった個所に貝塚は営まれた。貝塚のイメージとして大量の貝が廃棄されて厚い層をつくっていると思われがちであるが、実際には窪地や貯蔵穴や住居跡などにまとめて貝を棄てた「小貝塚」が圧倒的に多い。貝塚は採集された近くの場所で貝は消費されている。貝種の示す環境がその遺跡の古い環境であったことがわかる。縄文時代の後晩期に多い霞ヶ浦周辺の貝塚はシジミが主体で汽水系（淡水に海水が混じっていること）でどちらかといえば淡水に近い。また同じシジミの貝塚でもハマグリなど海産貝種を多く混入する場合とオオタニシなどの淡水貝種が多い場合で採取環境が異なることがわかる。古い海岸線の様子を残しているのは早期ハイガイ、前期カキガイ、中期ハマグリなどの鹹水系（塩分のつよい海水）貝塚である。魚類や少ない貝種は漁労活動や交易によって運び込まれた可能性が高いため実際の縄文時代の環境とはかけ離れている。取手市では霞ヶ浦や海岸線からはなれていながら大規模な中妻貝塚がつくられ、市内の各地に小規模の貝塚がみられる。大規模な貝塚は基地型の集落を想像させる。



衛星からみた遺跡分布

ひたちなか市三反田蜆塚（みたんだしいづか）貝塚

茨城県の中央部を横断する那珂川の河口から1.8kmほど内陸に入った標高20mの台地上にあるシジミを主体とする縄文時代中期末から後期にかけての貝塚。貝層は台地上の平坦地にいくつかのブロックにわかれて環状に分布する。北西の貝層が平面では最大で80×50mに広がる。出土品では骨角器に釣り針や銛が多い。小礫の両端を打ち欠いた石錘や丁寧に磨りきりで切り目を入れた石錘、土器片の両端に刻みをいれた土器片錘や土器片の周囲を丁寧に楕円形に磨いて刻みをつけた土器片錘などが目立つ。石錘や土器片錘にも精製と粗製の差があり、精製は重さを吟味して釣りに、粗製は網漁用に使用したと考えられる。クジラ、クロダイ、スズキやハマグリ、カキなど海産貝類などが出土しており典型的な漁労型集落といえる。いままでに貝輪を装着した女性埋葬骨、オジロワシの埋葬骨、深鉢形土器鳥形把手、埋納土偶が発見されている。

鳥形把手出土状態

土偶出土状態

オジロワシの埋葬と深鉢形土器鳥形把手

三反田蜆塚貝塚でオジロワシの埋葬が発見された。これまでも動物埋葬例はいくつか確認されている。動物の力を霊的なものとして種族の血筋のなかに取り込もうとする信仰がいわゆるアニミズムである。狩猟を生業とする種族にアニミズムは一般的と考えられる。（逆に日本人のように菜食化した民族では禁忌として特定の野菜をつくらない風習がある）おなじ蜆塚貝塚で出土した鳥形把手は2種類あり、深鉢形土器の口縁部分を波打つような形状の波状口縁として頂点部分に鳥形の造形を施したものである。市原市柏野遺跡でも出土している。これらの鳥形把手の特徴はいずれも鋭く湾曲した嘴を強調し猛禽類であるワシ・タカ類を表現している点である。さらに土器の把手に鳥の頭部を飾るという考え方は、埋葬されたオジロワシの頭部が欠如していたことに結びつく。アニミズムでは自然死にしろ生贄にしろ霊の宿る頭部と本体を別にして頭部は祭壇に供え本体は別に埋葬したのである。

オジロワシの出土

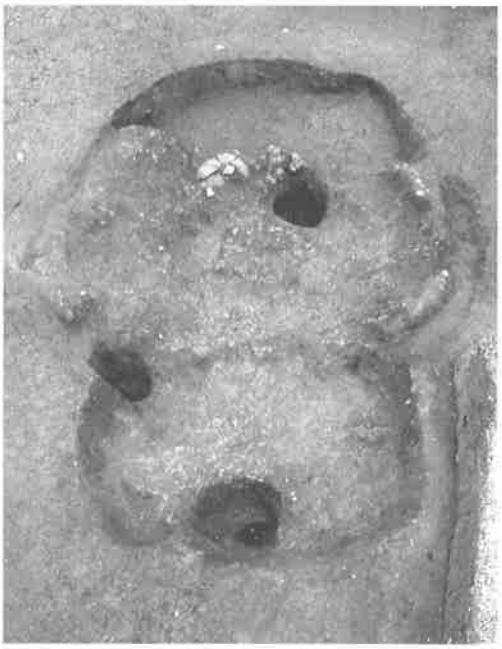
鳥形把手A

鳥形把手B

土浦市上高津（かみたかつ）貝塚

霞ヶ浦の西奥部に流れ込む桜川の右岸の台地に立地する縄文時代後期後半から晩期前半の貝塚。霞ヶ浦は現在淡水湖であるが縄文時代には直接海につながる内湾で古鬼怒湾の一部であった。現在の湖汀線からさらに4kmほど内陸に入った標高遺15～25mの台地を囲むように4ヶ所で大量の貝が斜面に捨てられた。貝はほとんどヤマトシジミである。この台地上に集落をつくった人々が貝塚をつくったと思われる。時期や規模、貝の種類、立地など中妻貝塚とよく似ているが、ここでは貝層を斜面に形成している点が違っている。貝層の主体がシジミであることから貝の採取がごく近くでおこなわれ、古鬼怒湾を中心に漁労活動がおこなわれた。漁労具の種類や数が少ないので作業基地がべつに存在したと思われる。

製塩をおこなった遺構として大型炉が発見され、非常に珍しい製塩土器の完形品が出土している。上高津貝塚では製塩炉と思われる遺構も発見されているので土器製塩が行われたことは間違いない。海岸で塩度を高めて藻などにしみこませて、燃料の豊富な内陸に持ち込んで処理したのであろう。



製塩炉

上高津貝塚の製塩炉と製塩土器

霞ヶ浦南岸の桜川村広畑貝塚で大量の文様のない薄い土器が発見され、その付着物などから海水を煮詰め塩を作るために使った特殊な土器であることがわかった。製塩土器は熱のとおりを良くするために、土器の厚さをぎりぎりまで削り、薄くしている。口の部分の飾りや模様はまったくない。縄文時代の製塩土器は後期後半から出現し晩期前半までおこなわれたと考えられている。古い時期につくられた製塩土器は口の部分を指でおさえて整えただけであるが、晩期になるとヘラ状の道具で削って仕上げている。中妻貝塚から後期後半、神明遺跡から晩期の製塩土器が出土している。土浦市上高津貝塚から製塩遺構と思われる大型炉が発見され、完全なかたちの製塩土器が出土している。

製塩土器を出土する遺跡の特徴は霞ヶ浦南岸の低地遺跡だが上高津貝塚は台地上にある。上高津貝塚は縄文時代後期も海岸線からは離れていたとおもわれ、海水を大量に処理して塩をつくることは困難であったと思われる。その点は中妻貝塚や神明遺跡でも同じことがいえる。したがって製塩土器が出土したことが製塩がおこなわれたと同じに考えることはできない。製塩土器の出土は交易の範囲を示しているとしかいえない。また縄文後晩期の人々が塩を何に使ったか不明である。貝塚から出土するから貝もしくは魚の加工に使うと言われたが違うようである。実際には塩を直接の交易物にしたと考えた方が素直である。

製塩土器

取手の縄文時代遺跡

取手市は縄文時代の遺跡が多い。取手市の地域の特徴は小貝川と利根川にはさまれた上流の北西から南東へ細長い台地と2つの河川のつくり出した低地流域で、ごく狭い範囲に長い縄文時代の各時期の遺跡の特徴をみることができる。台地は標高20～23m、低地は6m前後で比高10mほどは崖が多い。海岸部につながる河川流域であることから食料廃棄物である小規模な貝ブロックなどがみられ、そのために当時の環境や採集活動を知るための手がかりとなる動物遺存体など自然遺物の資料も得られる。河川に沿った縄文時代遺跡の分布をみると縄文時代早期の遺跡から出土した貝ブロックが海に生息する種類であったので最大海進の到達点が現在の取手市付近であったことがわかる。つまり現在の低地の標高6mくらいまで海面が上昇していたことがわかる。細長い取手市では海進であれば海の影響は川をさかのぼり、海退するにしたがって貝塚を構成する貝の種類から海の影響が少なくなっていった。

西方貝塚

小文間の台地上、利根川を望むもっとも標高の高い24～22mの台地の中央に位置する。周囲は2～3mの起伏があり、住居内覆土に堆積した貝層が地点貝塚となって最高地点から緩い斜面にかけて周囲150mの範囲で分布している。縄文時代中期前半から中葉および後半にかけて住居やフラスコ状土坑がつくられた。中期前半の時期につくられた遺構が遺跡の範囲全体を占める。中期前半の遺構でもっとも注目されるのが2段掘込みの竪穴住居である。炉跡をもたず、竪穴住居中央の主柱間をさらに一段堀下げている。こうした住居の柱穴から彫刻の施された大型石棒や埋葬された犬の骨が発見された。中期中葉には遺跡の南側にフラスコ状土坑群がつくられた。フラスコ状土坑は埋葬にも利用された。その後遺跡は縮小し中期後半の時期には南側斜面だけを利用して住居をつくっている。すでに住居の堀込みは浅く著しく重複してわずかな薄い貝層だけが残った。

西方貝塚の石棒

石棒・犬の埋葬

西方貝塚では廃絶された住居の柱穴から特徴的な遺物が出土した。縄文時代中期から後期にかけての特徴的な遺物に石棒がある。男性の性器を模したもので大型と小型がある。西方貝塚出土の石棒は中期のなかでも古い時期に属し、文様的な彫刻が施されている点で珍しい。その後、市内の遺跡では西光寺前遺跡や神明遺跡でも出土している。

西方貝塚では住居跡の柱穴から丁寧に埋葬された犬が発見された。同じような例はすでにいくつか知られて、縄文時代の当時、犬が家族とおなじように大切に扱われていたことが想像できる。

縄文犬の埋葬

「呪術」からの開放

鈴木　素行

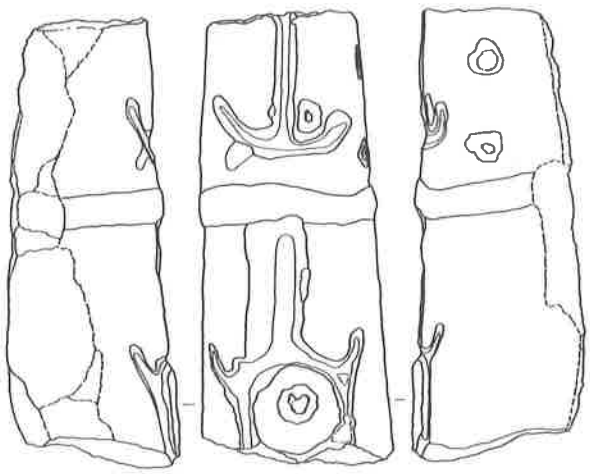
石棒の用途についての記載に「呪術」という語句をよく見かける。詳細はわからないのに、何となく理解できたような気がする。その安心が思考を停止させるのだ。

石棒について考えるきっかけを与えてくれたのが、取手市西方貝塚の彫刻石棒であった。発掘調査からは既に20年が経過している。石棒は,住居跡の柱穴に埋められていた。状況を図面と写真で記録した後に取上げて、初めて彫刻を確認したのだった。縄文時代中期の関東地方には、彫刻が施された石棒をほとんど見ない。山塊を越えて300kmほども離れた北陸地方に多くの彫刻石棒が報告されていた。この距離を移動した可能性を検討するために、新潟・富山・石川・岐阜の各県で彫刻石棒を見て回ったのだが、同じ石材のものは見当たらず、彫刻された文様の形象も異なっていた。

北陸地方の彫刻石棒は、石棒即ち男性器を意匠とする石製品に、女性器を意匠とする文様が加えられて、性の交わりが表現されたと考えられている。文様の形象が異なり、直接的な関わりはなくても、西方貝塚の彫刻石棒に同義を認める。むしろ、彫刻文様の構図に見る物語性としては、こちらの方が具象であるかもしれない。

勃起した男性器は、成人を象徴する。成人には、集団の成員としての社会的な承認が必要とされた。交合する女性器は、性関係を伴う結婚を象徴する。これは婚入者を集団の成員として承認することでもあった。これらの通過儀礼の装置として,石棒は機能したのではないだろうか。通過儀礼を管理,執行した人物については、「呪術者」と表現するよりも、集団を統率する地位にあったと考える。

石棒の他にも、縄文時代には性を象徴した道具があり、文様を見出す。性のデザインに満ち溢れた世界を想像することは、私にとって「縄文時代観の転換」であった。



石棒図

0　10　20cm

＊通過儀礼　集落のなかで子供が大人として認められるときに行われる儀式。精神的なものと肉体的なものがある。抜歯はわざわざ健康な歯を抜いてその痛みに耐えることで大人であることの証しとする一般的な例である。少年期における共同体の保護から、共同体の構成員としての権利とともに責任が生じることを身体的な痛みで知らしめる意味があるとされる。もともとは予防医療的な意味で男であれば肉体的な怪我、女であれば出産に耐えることができるように痛みを体験させておくことからはじまった。（註　宮内）

中妻貝塚

利根川と小貝川は取手市の東端で合流する。そこからさかぼって1.5kmほどの小貝川上流に望む標高23～22mの小文間台地上にある縄文時代後期前半から晩期前半のヤマトシジミを主体とした貝塚。東西を谷津に挟まれ、直下には小貝川流域の低地が広がっている。台地の中心部はややくぼ地となっており、貝層はこの窪地を中心に平坦面に堆積して形成された。周辺の斜面には貝層は形成されない。貝塚の全体規模は径約150m、厚さ1～2mの純貝層からなる環状貝塚である。貝層は連続して分布し南西側で開口する。住居あるいは建物遺構は貝層の範囲と一致し貝層下あるいは貝層中から検出された。シカ・イノシシやガン・カモ、ハクチョウなどの動物遺体が多く、漁労具ではヤスが目立つ。これらの点から中妻貝塚は広範囲の湿地帯の環境を利用して淡水系の漁労、鳥類の捕獲、シカ・イノシシの狩猟活動など、また製塩など多様な生産活動をおこなっていたことがわかる。そのほか後期中葉の多数集骨墓が発見された。

中妻貝塚の共同墓（集骨土坑）

中妻貝塚で発見された集骨墓（土坑）は縄文時代後期に形成された共同体を反映している。これだけ多人数が埋葬されたことから、環状列石や大型住居などと同じように背景に大規模な共同体を想定することができる点が重要である。さらにこの共同墓が「再葬」であったことから、わたしたちが発掘で掘り出す埋葬骨以上に「風葬」が普遍的であったとわかる。「風葬」や「廃屋墓」は「放置葬」ともよぶべき習慣で実効的な葬儀行為が伴わないのである。「葬儀行為」は生き残ったものが「遺産の継承者」としておこなう行為で家畜や土地や家を継承すること、それを共同体のなかで宣言することが重要なのであった。もし継承すべきもの、遺産がなにもなければ誰も葬儀をおこなうものはいなかったとも考えられる。しかしまったく葬儀がなかったとは考え難い。その中間的な葬儀が「風葬」や「廃屋墓」なのである。しかし、風葬の土地や家屋を開発するとき、それはいまだに死者の領分であることに気づくのである。そこではじめて「放置されていた遺体」を「再葬」したのである。したがって再葬墓は縄文時代後期の大土木工事にあたる盛り土遺構と関連があり、初期弥生時代の耕作地の再開発につながってゆく。

西方貝塚放置状態の人骨

神明遺跡

中期末から晩期終末にいたる遺跡。標高20～21mの台地の内陸部中央にあり、わずかな高低差はあるものの台地上はほぼ平坦で周辺は谷津に囲まれている。遺跡の中心近くに神明神社があり、その西側に低い窪地がある。この窪地をはさんで西と東に縄文時代晩期の集落跡がある。西側には住居跡や倉庫群とみられる柱穴にともなってシジミの小貝塚がある。南東に中期末、北東に後期中頃のほぼ単期間の地点が存在する。また窪地北側は地表面で遺物がみられないので集落跡の開口部と考えられる。これらの点からこの遺跡は浅い窪地を中心に集落を長期間営んで、時期により移動と拡大を繰り返してきたものと考えられる。製塩土器を出土し、自然遺物に海産のものがみられるなど交易や活動範囲を考える上で貴重な遺跡である。縄文時代最終末の土器を出土した。

神明遺跡の近景

神明遺跡もしくは盛り土遺構の意義

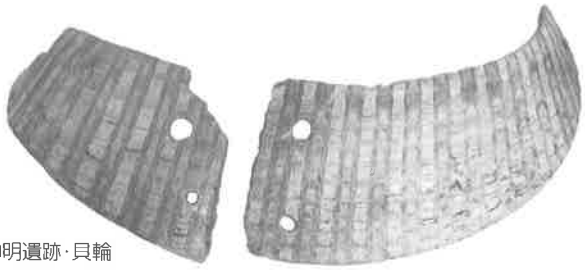
最近、注目されているのが縄文時代後期の盛り土遺構である。いくつかのタイプがあるようで単純に比較できないが、神明遺跡では窪地をはさんで対置するように集落が営まれている。さらに竪穴や覆土といったものはみられず、柱穴だけが重複して発見されている。これらの特徴の中には盛り土遺構に似ている部分がある。盛り土遺構の出現の契機には倉庫遺構の出現があると思われる。それは単純に倉庫が作られたかどうかの問題ではない。大規模な土木工事をおこなうためには、工事を実行するための組織と到達目的を含めた計画が必要である。それまでの単純な住居の集合体ではなく、共同で経営される集落といった姿がみえてくる。そこには共同体のシンボルである倉庫あるいは大型建物があり、それらつくりあげた倉庫や大型建築物を将来にわたり共同体で管理してゆくシステムが不可欠となる。

神明遺跡現場

神明遺跡から出土したクジラとアワビ

神明遺跡は小規模だが貝層があったので自然遺物の残り方がよく、たくさんの動物骨が出土した。そのためにどのような食料を入手していたのかを知ることができた。シカ、イノシシの骨が多く出土しており、焼けたり細片化しているので骨髄まで丁寧に食べていたことがわかる。サルも食料になった。魚類ではコイ、貝ではオオタニシが目立つ。内陸なのでこれら陸上ほ乳類や淡水産魚類や貝類は当然であるが海産のクジラやアワビが出土している。ほかにも外洋性の貝類が出土している。当時の広域な漁労活動の反映と考えられる。

三反田蜆塚貝塚でもクジラの椎間板が出土している。西方貝塚でもクジラの骨が出土している。神明遺跡ではアワビやクジラの椎骨（背骨）が柱穴から出土した。単に食料としてはアワビの貝やクジラの椎骨は意味が不明である。これらは成果品という特別な意図をもって持ち帰り埋納されたと思われる。食料のなかでもその一部や痕跡を柱穴にわざわざ埋納するという儀式が存在したと考えても許されるであろう。

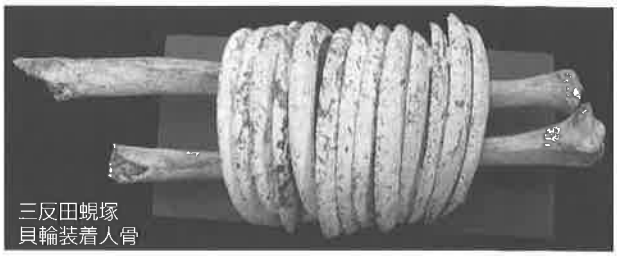


神明遺跡・貝輪

貝輪

貝輪はよく知られた縄文時代の装飾品である。貝を円環状に磨いて腕輪とした。細いものと幅や厚みがあるものの2種類ある。材料はサルボウガイのように入手しやすいものからイタボガキのように外洋性で比較的入手に手間がかかるもの、オオツタノハなど交易などによってしか入手できないものなどさまざまである。神明遺跡で出土した貝輪は幅広で組み合わせてつなぐために紐通しの穴まであいていた。2つの割れ口はぴったりあわさるため、紐通しの穴は補修孔だったのか組み合わせ式なのか不明である。三反田蜆塚貝塚で発掘された埋葬女性人骨は細身のベンケイガイ貝輪を13個あまり装着していた。

神明遺跡のサルボウガイ製貝輪は放射状肋模様を美しく見せるためにきれいに表面の研磨を施していた。西方貝塚出土のイタボガキ製貝輪はカキガイのもつ素地の真珠層の美しさを強調するため研磨して幅広に仕上げていた。こうした幅広のタイプはいくつも装着することは困難なので単独で使用したと思われる。



三反田蜆塚
貝輪装着人骨

縄文時代最後の土器

神明遺跡から非常に貴重な縄文時代最後の時期の土器が出土している。東北地方の大洞A式もしくはA'式土器の文様的な流れを受け継いで、平行隆線文あるいは沈線文を特徴とした土器である。関東では千網式と荒海式土器と呼ばれ、東北地方から西日本まで強い斉一性をもった土器様式が流行する。

神明遺跡・耳飾り

取手市の縄文時代年表

時代	区分	年代	取手市の主な遺跡	トピックス
旧石器時代				
			ひたちなか市後野遺跡	土器の制作がはじまる
		B.C.11000	柏原遺跡（取手市野々井）	細石刃文化
縄文時代	草創期	B.C.10000		
			上高井向原遺跡（取手市上高井）	氷河期が終わって温暖化し、海面が上昇してゆく（海進現象）
			利根町花輪台貝塚	住居跡や小型の土偶が出土
	早期	B.C.8000		海面の上昇が最大となりサルボウやマテガイなど海の貝が出土
			大渡遺跡（取手市野々井）	
	前期	B.C.6000		
			向山貝塚（取手市下高井）	貝に混じってモリや、貝輪などの装飾品が出土
	中期	B.C.4000		
			西方貝塚（取手市小文間）	各地で大規模な集落・貝塚が形成される
			ひたちなか市三反田蜆塚貝塚	
			神明遺跡D地点（取手市上高井）	
	後期	B.C.2000	神明遺跡B地点	海面が下降しはじめる（海退現象）
			土浦市上高津貝塚	
			中妻貝塚（小文間）	101体の再葬墓が作られる
				製塩がはじまり、製塩土器がつくられる
	晩期	B.C.1000		海面が現在の位置となる
			神明遺跡C地点	遺跡数が急激に減少する
			神明遺跡A地点	日本でも一部で稲作が始まる
弥生時代		B.C.300		
		B.C.200	東原遺跡（取手市野々井）	取手に弥生時代遺跡が現れる

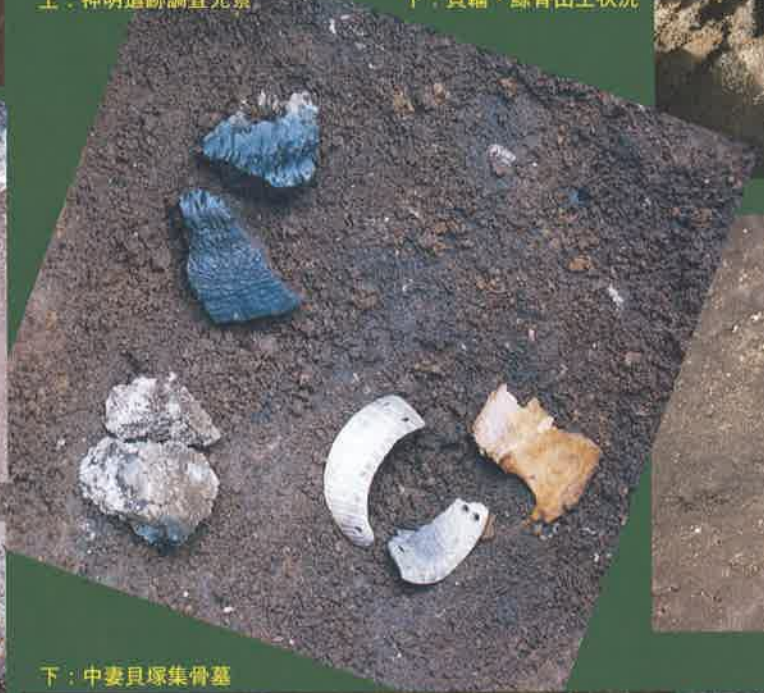
上：鹿角の加工作業品
下：アワビや鹿の出土

上：神明遺跡調査光景　下：貝輪・鯨骨出土状況

上：柱穴出土の鯨骨

下：焼けた鯨骨の出土

上：ヘアピンの出土状況



上：小型土器の出土

上：ツノカイの出土

下：中妻貝塚集骨墓

下：中妻貝塚集骨墓から出土した焼骨

上：中妻貝塚集骨墓から出土した櫛

取手市埋蔵文化財センター第12回企画展

森の祈り　縄文人の心と文化

平成16年2月24日～4月25日

取手市教育委員会